

中国の高校における日本式教育の導入に関する研究 —信男教育学園の教育実践を例として—

キーワード：日本式教育，移植，信男教育学園

教育システム専攻
魯林

目次

序論

第一章 先行研究及び問題の所在

第一節 先行研究の検討

- 1 中国における日本語教育に関する先行研究
- 2 日本式教育の借用に関する先行研究

第二章 信男教育学園の教育現場

—生徒の視点を中心に

第一節 信男教育学園のアドミッション・ポリシー

第二節 信男教育学園の教育現状と問題点— 生徒の視点

- 1 学業の現状
- 2 評価システム
- 3 生徒と日本人教師との関係

第三章 信男教育学園の教育現場

—日本人教師の視点を中心に

第一節 行政管理の問題点

第二節 日本人教師の資質及び教授法

- 1 日本人教師の資質
- 2 日本式教育を移植するための理想的な教授法

第四章 教育現場の問題点と改善への提言

第一節 各教科教師の安定的な確保

第二節 学習コース設定の見直し

第三節 情報交換制度の整備

- 1 生徒- 教師- 保護者の連動制度
- 2 事例研究会制度

第四節 履修科目の改善

結語

主要参考文献

謝辞

付録

写真ファイル

本文

序論では、本研究の背景、目的、対象を取り上げて説明した。改革開放以来、中国は国際社会との交流や接触もますます頻繁になっている。特に、中国と日本は引越しのできない隣同士であるがゆえに、両国間の友好往来と相互理解、相互尊重はより一層重大な意義を持っている。

最近の日本ブームに乗じて、中国で日本語を学習する人々の数は急速に増加した。例えば、2012年の時点で中国の大学で日本語を専攻とする学習者は24万人を超えた。

中国の大学の日本語教育ブームに刺激され、一部の高校も日本語教育に取り掛かった。その中で、2010年に信男教育学園は上海七宝教育集团傘下にある私立文来高校と提携し、当学校の国際部運営ライセンスを借用する契約書を締結した。対外的には、信男教育学園は文来高校の一部として存在するが、ライセンスの借用によって、中日合作班の運営に関わる運営費や、生徒募集管理、日常の教学などは全て信男教育学園が行うようになった。実際、信男教育学園は日本の高校の教育理念、制度、方法などを全方位から「移植」(transplant)して、中国人の高校生を育成している。これは中国国内からみればごく稀な教育実践である。このような「移植」教育システムの特徴や問題点などを研究することによって、中国の高校教育に斬新なモデルを提供することができるだけでなく、人材育成にも新たな示唆を与えられる。

本論文では、信男教育学園の教育現場に立脚し、まず中国の高等学校における日本語教育及び日本式教育の移植に関する先行研究を分析し、その問題所在を指摘する。次いで、中日班の生徒の視点からアプローチし、調査の結果を基にして生徒の学業現状、評価システム、教師への印象などの面を詳しく考察し、信男教育学園の教育特徴や問題点を見出そうと試みる。その後、中日班を担当する日本人教師の視点から立ち入り、教師の資質、教授法、教師と学園の関係などについて、調査結果を利用して分析し、教師の目から見る学園の全体像及び問題点を

浮き彫りにする。更に、学生と教師が描いた学園像に基づき、信男教育学園の更なる発展の為に具体的な処方箋を提示し、中国における日本の高校教育の移植の条件と課題をまとめる。

第一章では、まず先行研究を顧み、その問題点を考察し、その上、本研究の方法を記述した。中国では日本語教育の歴史、日本語の教材や教授法に関する研究の数も質も一定の水準に達しているが、主な先行研究は中国大学の日本語教育に注目を集めた。それに対して、中国の高等学校の日本語教育がかなり等閑視されている。その理由として、第一、日本語を第一外国語（中国では「一外」という）として開設する中国の高等学校は極めて少ないこと。第二、中国の「普通高等学校招生全国統一考試」（日本の大学入学に相当するもの）の外国語という科目に日本語が一応選択肢に入っているが、実際、大学の募集要項をみれば明らかになるように、殆どの学部や学科は英語を第一外国語としての受験生しか取り入れない。第三、中国高校における日本語教育に関する研究がまったくないわけではないが、研究対象は主に公立高等学校に集中し、旧植民地の関係もあり、東北エリアは主な注目先である。

信男教育学園のように日本語教育だけでなく、他の科目もすべて日本語で講義を行なうこと、即ち日本式教育を移植している中国の高校は殆どない。それゆえ、中国国内で、高校における日本式教育の借用と移植に関する研究は殆ど生産されていない状態である。これは本研究の難点であり、魅力でもある。

そこで、本研究は教育学、教授法、異文化交流などの論理や視点を総合的に駆使し、アンケート調査を行う。それに基づいて、以下、六つの課題（及び解決方法）を検討考察していく。(1) 生徒の学業の現状、(2) 生徒と教師の人間関係、(3) 生徒及び教師に対する評価体系の確認、(4) 学園の教育理念及び日本語式教育を移植する必要性、(5) 学園の運営状況及び行政管理の問題点、(6) 日本式教育を借用するための提言。

第二章では、信男教育学園のアドミッション・ポリシーを概観した上で、中日班の生徒の視点から信男教育学園の教育現状及び問題点を考察してみた。信男教育学園は創立以来、日本の高等学校へ編入するクラスは、毎年定員オーバーするほどの人気があった。受入方針としては「文化、礼儀、健康、グローバル視野を持つ青年を育成することを旨とする。また、誠心誠意の教育を堅持し

て国民素質の向上を最終目標とする」ことを挙げられる。それ以外、次の四点が明らかになった。

第一、普通の言語学校と違って、中日班は従来日本語教育の強みを発揮し、更に日本の私立高校のカリキュラムをそのまま「移植」し、理系を含む全課程をすべて日本語で教授する。

第二、修学旅行を必修項目として設置している。年に一回必ず卒業班全員が日本の姉妹校へ出向かい、日本の学校で学習し、日本人学生と交流を実施することになっている。これによって、生徒たちが早くも日本の慣習や文化に慣れ、日本に留学する際に違和感も減らすことができる。

第三、盛んな国際交流を通してグローバルな人材の育成を目指している。中日班の卒業生を受け入れる日本の姉妹校の数も年々増え、現在東京をはじめとする関東はもちろん、北は北海道から、南は九州まで、計十校と姉妹校提携を結んでいる。

第四、「信男教育留学基金」を設置すること。信男教育学園は、留学したい気持ちがあるが、日本の現状不明でなんとなく不安で躊躇している優秀な学生を対象に年間総額 100 万円奨学金を給付している。その他、学校内部の奨学金として、入学してから卒業までの評価により、学業、人格共に優れた生徒に対し、奨学金を支給する制度もある。

このように、信男教育学園は国際的視野を持つ学生を育成することをめざし、何よりも先に日本語教育に大きな力を注ぎ、学生たちに次の段階に上がる時の必要な語学能力を習得させた。

また、中日班の平常点評価方式は比較的多様性を示しているため、生徒は信男教育学園の現存する教育システムに対する評価は比較的高い。更に、中日班のあらゆる科目は日本人教師により担当されるものであるため、日本人教師は中日班の生徒にとって単なる専門知識の伝授者という存在だけではなく、異文化を体験・学習する最も身近で重要なコミュニケーションの対象であることが分った。授業中、日本人教師は自ら積極的に日本文化のエッセンスを生徒に伝えられるが、授業時間外に生徒との交流や授業中の指導法の面において少し改善の余地があることも指摘された。

第三章では、中日班の教師の視点から信男教育学園の教育現状及び問題点を考察してきた。日本人教師は信男教育学園の事業で最も重要な役割を果たしている。学園にとって、如何にして新しい教師を募集するかという問

題は非常に目立っている。特に理科、数学、国語、社会の担当教師を確保しにくい点である。

中日班を設立する当初、ライセンスの申請は大きな壁にぶつかった。やむを得ず、七宝教育グループ傘下の私立文来高校のライセンスを借用して文来高校の中で更に国際部（中日班）を設立した。そうすると、中日班の実際の運営者及び100%の出資者は信男教育学園であるが、対外的には一応文来高校の名義を借用しているため、日常の教学や管理において文来のスタイルと噛み合わせない時もしばしばある。

例えば、日本人教師を募集する際、日本人教師の給料や他の待遇は信男教育学園から支給される一方、教師を受け入れる名義は文来高校である。信男教育学園の教員募集は毎回文来高校に頼みに行かなければならず、相手の都合に合わせないといけない場合が多い。次に2015年より、中国政府が国内外国人就労許可政策の変更があり、外国人の雇用を60歳までと規定し、60歳以上の人をどうしても雇いたい場合、年間所得税12万円(約200万円相当)を政府に収めなければならなければ、雇用できない現状である。これは一私立学校にとっては不可能に近い、ハードルの高い規制である。その他、日本国内でも高校の理科、数学教師が非常に不足している。こうした厳しい環境の中で、教師生涯の途中で仕事を辞めて中国に来る人が殆どいない。これにもかかわらず、信男教育学園で働いている現役の日本人教師が職場に対する帰属感は比較的高いことが分った。その理由の一つは学園の教育理念への賛同が挙げられる。

そして、日本人教師は日常教学の過程で、「個性を重視する教授法」と「自我を発見する指導法」を目指しているが、中日班に学習意欲が低い生徒や学力の低い生徒が混じっているがゆえに、指導の時に大変苦勞で手を焼いていることも調査で明らかになった。それは、教育に関する情報交換や教育の訓練・研修セミナー、模範教師の授業参観、カリキュラムと教授法開発に関するワークショップなどに参加する機会が足りないからである。つまり、現在、信男教育学園は日本人教師に必要な専門性開発のための支援をもっと多く提供することが望まれる。

総じて言えば、学力を保障するために、学園のすべての教師は一人一人の学生の能力、適性に応じて教育活動を実行するという責任を負う態度を持たねばならない。また、生徒の成長保障を実現するには、教師側からの揺さぶりや学園側からの個性的追求が大きな意義を持ち、全体的に見れば生き生きとした動態的な教育活動が展開されなければならないし、それを準備するには、生徒の

関心や興味を的確に把握して授業を工夫すると同時に、あらゆる生徒の自己理解を深め、将来に対する自分なりの志の持たせ方の探究も必要とされている。

第四章は、信男教育学園の教育現場への提案を中心に述べたものである。日本も理科教師が不足する状況の中で、信男教育学園の日本人教師の求人ルートづくりは大変困難となった。その現状を直面している中で、学園の出した改善対策は次の通りであった。まず、2018年より、元福岡高校校長(藤野重信氏)を雇い、上海文来高校国際部中日班の校長として着任させた。日本式教育を徹底的にするため日本人の教育資格者を導入すべきであると判断したからだ。もう一つは、教師へ老後日本帰国後の生活を考慮して、待遇面も年金補助や、交通費手当、住宅手当などを出しただけでなく、年間有給休暇の日数も次第に増え、日本人教師がより安心し長く働いてくれるように努力した。

それと同時に、学習コースの設定し直しを考慮に入れ、「2+1.5コース」から「2.5+1コース」や「3+0コース」へと変更する案を検討している。なぜなら、現在、生徒が上海で高校二年生終了後姉妹校に編入され、その後、日本の高校を卒業して大学へ進学していく。しかし、一年以上日本の高校で勉強したことを理由に「留学生として認めない」国公立大学が増えてきた。これは生徒にとっては一種のデメリットであり、プレッシャーが大きいからである。

一方、情報交換制度の完備を努める必要がある。特に、保護者集会を設けて、「生徒—教師—保護者の連動制度」を作り、事例研究会を定期的に行き、生徒の問題がどういう原因と条件が絡んで起こっているかというケース理解を現実に行い、的確な指導に役立つであろうし、教師同士の人間関係が深まって、チームワークが出来るようになるのであろう。

更に、履修科目の改善に力を入れるべきである。特に、中日班のカリキュラムに語文という履修科目を組み入れ、語文教育に対する従来の考え方を再検討し、語文・古典教育のメリットを認識し、それを重視したほうがいい。

終章では、まず、上海で初の日本式教育を借用した高等学校としての信男教育学園の優れた教育実績に注目した。日本式教育を借用する過程で、最も重要なのは、中国の生徒に日本語・日本文化の理解促進や日本語を通じた相互交流の場の提供や学習支援のことである。それを実現するために、信男教育学園のように、各教科の教

員は全て教育経験のある日本人教師を雇用・確保することは一つの大前提である。その上、海外研修旅行や国際交流、課外の充実した活動などは生徒の異文化コミュニケーション能力の向上に非常に有効的で参考の価値が大きい。つまり、単なる知識の伝授ではなく、「発見、思考、活用」という主体的過程の中で、「異文化理解そのもの」に関する学習が行われることは大切である。

また、信男教育学園の多様な評価システムが注目される。中日班の使用している口答試験、演技式の評価方式、更に生徒の日記やPPTなどによる評価方法を今後広げていく価値がある。このような評価システムは、一定の客観性と正当性を保ち、生徒のニーズや希望が尊重され、保障されると言える。更に、評価方法の多様化と柔軟性は生徒の従来の受験を中心すると意識からある程度解放されることが出来、生徒の人間としての自分探し、自らの趣味・長所・生き方を探究する主体的な意欲を促進することが可能である。

更に、信男教育学園の「個性を重視する」と「自我を発見する」指導法は日本式教育を移植する際のキープポイントであり、それを普及する必要がある。中国教育部の部長陳宝生は「必死的中学、快樂の大学」の現状を変えなければいけないと宣言し、従来の詰め込み教育を一変し、中学生と高校生の学業的負担を減らすべきだと主張した。これは日本で長年実施されてきた「個性化モデル」の教育方針と重なる部分が大きいと考えられる。それ故、信男教育学園モデルは今後全ての中国の高等学校に大きな参考になる。

他方、今後更なる発展を成し遂げるためには、ハードとソフト両面にわたって今後信男教育学園の更なる発展を成し遂げるためにその方針や対策を整理してみた。ハードの面として、教員または生徒の研究・学習環境の整備を最も緊急な課題にすべきである。ソフト面として、まず扱わなければならない課題は優れた教員の確保と教師の資質・力量の養成の問題である。次いで、補強・改善すべきところはカリキュラムである。さらに教師に対する評価システムを強化すべきであろう。

主要参考文献

竹熊尚夫「日本の高専輸出とその『移植』プロセスに関する予備的研究—モンゴルとマレーシアの比較枠組み」『九州大学大学院教育学研究紀要』2016. 18: 15—28 頁。
青木直子「自律学習」『新版日本語教育事典』日本教育学会、大修館、2005。
縫部義憲『学校日本語教育学の構築と教師の成長』風間

書房、2007。

小山真理「授業分析と教師の内省」『文化女子大学紀要』14、2006、129-141。

村岡英裕『日本語教師の方法論』凡人社、1999。

河村茂雄『教師特有のビリーフが児童に与える影響』風間書房、2000。

勝田守一『教育と教育学』岩波書店、1970。

田中孝彦『人間としての教師』新日本出版社、1988。

大田堯『教育とは何か』岩波書店、1990。

堀尾輝久『人間形成と教育』岩波書店、1991。

天野郁夫『試験の社会史』東京大学出版会、1983。

柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』有斐閣、1992。

藤田英典『子供・学校・社会』東京大学出版会、1991。

藤田英典・田中孝彦・寺崎弘昭『教育学入門』岩波書店、1997。

(中国語)

國家教育委員會基礎教育司編. 全日制普通高級中學日語教學大綱. 學科教育, 1996, 2-8 頁.

修剛. 轉型期的中國高校日語專業教育的幾點思考, 日語學習與研究, 2011. 4: 1-6 頁

修剛、李運博編. 跨文化交際中的日語教育研究. 高等教育出版社, 2011.